

はじめに……………7

一 源氏物語の時代……………21

物語作家誕生……………21

- 1 紫式部、倫子家女房説をめぐって……………21
 - 2 物語を書く女……………23
 - 3 父亡き賢子の家……………25
 - 4 彰子後宮への初出仕……………26
 - 5 後宮女房・藤式部——日記の存在について……………29
 - 6 紫式部の身分 私の上臈女房として……………32
 - 7 中宮彰子と紫式部……………34
 - 8 物語を書く女——作家・紫式部の誕生……………36
 - 9 清少納言と小馬のこと……………38
- 『源氏の物語』誕生……………40

- 1 豪華本作成の意味……………40
 - 2 昭和の源氏「成立論」の時代……………41
 - 3 『源氏物語』の浄書本と草稿本……………42
- 二 「廿卷本『源氏物語絵巻』」詞書の本文史……………

——「撰関家伝領本」群」と別本三分類案鼎立のために……………46

- 1 徳川・五島本『源氏物語絵巻』の成立史論……………47
- 2 『源氏物語絵巻』詞書の本文批判……………52
- 3 撰関家傳來本系『源氏物語』の本文史……………56
- 4 撰関家傳來の『源氏物語』本文史……………64
- 5 古伝本系別本第一類Ⅱ撰関家傳來本系本文の価値……………66

三 「秘伝」から「秘説」へ——『原中最秘鈔』の學史と學統……………75

- 1 『原中最秘鈔』の研究史……………75
- 2 広本『原中最秘鈔』注釈稿……………78
- 3 『原中最秘鈔』の成立……………93

四 源平政權交代史の幻影——『太平記』外伝……………107

- 1 歴史叙述の政治性……………107
- 2 もうひとつの『太平記』……………108
- 3 御三家・紀州徳川家の論理……………112

五 伝阿仏尼等筆本『源氏物語』傳來史……………120

- 1 阿仏尼本『源氏物語』研究史……………120
- 2 池田亀鑑と伝阿仏尼等筆本『源氏物語』……………122

3	鎌倉時代 小倉山荘から伏見宮へ……………	129
4	江戸時代 伏見宮から紀州徳川家へ……………	130
5	昭和時代 売立で神戸、そして東洋大学図書館へ……………	133
六	佐渡時代の大島本『源氏物語』と桃園文庫……………	142

1	高木文と田中とみ……………	143
2	大島本『源氏物語』の成立事情……………	144
3	佐渡田中家と大島本『源氏物語』……………	149
4	鈴木重嶺と勝海舟、そして大島本『源氏物語』……………	152
5	吉見正頼と『源氏物語』……………	159
6	桃園文庫の雅康臨模本『源氏物語』五四帖青焼き写真複製本文……………	162
七	〔戦国時代〕の『源氏物語』本文史研究……………	170

1	「帚木」巻の本文——統紹……………	170
2	近代の「伝阿仏尼等筆本」校訂本文……………	181
3	駿河御讓本と『源氏物語』傳來史……………	186
4	飛鳥井源氏学と『源氏物語』學藝史……………	189
5	佐々木《大島本》本文批判定位の問題……………	194
八	『源氏物語』本文研究誌列伝……………	207

1	山脇毅 河内本の発見……………	207
2	中村義雄 源氏物語絵巻詞書本文が古伝本系本文であること……………	211
3	阿部秋生 諸本分類の作業仮説……………	213
4	室伏信助 大島本源氏物語の本文研究……………	217
5	伊井春樹 大島本源氏物語本文と校訂方法……………	219
九	池田亀鑑と桃園文庫の時代……………	228

1	幻の『源氏物語全註釈』——萩谷朴小伝……………	228
2	水仙の花……………	230
3	『校異源氏物語』の時代——桃園文庫の人物群像……………	234
4	桃園文庫の『源氏物語』……………	237

附篇

一	葦手、歌絵を思ひ思ひに書け——書と絵と歌の力と王朝物語の生成……………	249
	はじめに……………	249
1	絵物語を読む女……………	250
2	弥生十日の藤壺中宮物語絵合……………	254
3	弥生二十日の物語絵合……………	256
4	「梅枝」巻の物語論……………	259

5	物語作者としての浮舟……………	265
	結語……………	268
二	『光源氏物語傳來史』を読むための人物誌……………	273
1	徳川・五島本『源氏物語』の系譜……………	273
2	伝阿仏尼等筆本所有者の系譜……………	276
3	大島本成立期所有者の系譜……………	284
4	大島本佐渡時代、貝塚田中家の系譜……………	286
5	大島雅太郎から古代学協会へ……………	294
	資料	
	源氏物語青表紙 <small>定家流</small> 河内本分別条々……………	303
	初出一覧……………	309
	終わりに……………	312

書物との邂逅

わたくしは、数ある『源氏物語』伝本群において、いわゆる伝阿仏尼等筆本『源氏物語』ほど、数奇な運命をたどった伝本を他に知らない。この伝本をわたくしが知るようになったのは、池田亀鑑の『花を折る』の中で、次のように紹介されていたからである。

本のゆくへ

池田亀鑑

戦争前、源氏物語の古寫本を探して全国を歩いてゐたころ、今日でも忘れられないことが一つある。それは、ある道具屋の世話で一外人の手に渡つた源氏物語に關してである。その古寫本は、鎌倉時代の中ごろ、當時の學者や歌人達が分擔して書いたもので、非常にめづらしい本文系統のものであつた。買ひ主の外人は、實は蒔繪の箱の方が氣に入つて買つたのださうだが、ほくとしてはもちろん本の方が問題だつた。何とかしてその本文をしらべて置きたいと、あらゆる誠意と手段をつくして、道具屋のいふ通り何べんとなく懇請の手紙を出したのだが、當人は決してみづから返事はよこさなかつた。

日本の學者がそれほど熱心になるからには、きつとすばらしい本にちがひない、そんな本はうつかり見せられない、と腹をきめるやうになつたらしい。ある時、何回目かに出した依頼状に、道具屋を通してやつと返事が來た。本を見せるから何月、何日、何時、オリエンタル・ホテルに訪ねて來い、時間厳守のこと、といふのである。ほくは狂喜した。すぐ同學のM君をさそひ、寫眞屋と三人で、神戸行の急行に乗つた。定刻より一時間前にホテルにつき、時刻の來るのを待つた。

そのうちに時間があつた。いよいよ本を見せてもらへる。と思ふと胸がはずんだ。しばらくすると、ホテルの支配人が出て來て、實はせつかくきていただいたけれど、けふはからだの調子が悪いからあへない、出なほしてもらひたいとのあいさつだ。ほくたちはびつくりした。ではこの次はいつ伺つたらよいでせうかと問ふと、支配人は、氣の毒さうな顔をしたが、判りません一點ばりできりつくしまもない。ほくは卑屈に見えらるくらゐ事情をうつつたへて懇願したが、無用だつた。

M君に助けられて玄關を出た。が、石段の半ばで足が動かなくなつた。たうとうそこにへたばつてしまつた。あとからあとから止めどもなく涙が出る。半時間ばかりしてふとポケットに手を入れると、キャラメルの箱が指にふれた。いきなりつかみ出してそいつを石段に叩きつけて「畜生」とわれながら大聲でどなつた。「M君かへらう。あきれた時間厳守だ」と、いくらか氣分がおちついたので歩き出した。

近ごろ熱心な學者がよく訪ねてくる。藏書を見せてくれとの強引な直接談判だ。豫告なしにやつてきて、半日も玄關にねばられてはやりきれない。さういふ時によくは、ふとオリエンタル・ホテルの玄關を思ひ出す。千里の道を遠しとせずやつて來た學者の氣持も判るが、相手の迷惑も考へてやる必要があらう。雙方謙虚な思ひやりが大切だ。朋あり遠方よりきたる、また樂しからずや、とばかりではすまされない今日の暮らしなのだから。それにしても、あの國寶的な源氏物語の寫本は、今どこにあるだらうか。無事に戦火からの